

## 『釈禪波羅蜜次第法門』における因縁門について

大松久規

## 問題の所在

智顛（五三八―五九七）の実踐行法は、『摩訶止観』における止観の確立によつて完成されるが、これはあくまでも晩年のことであつて、前期時代は『釈禪波羅蜜次第法門』（以下、『次第禪門』）に示されるような禪観が主であつた。<sup>(1)</sup>

筆者は、以前、『次第禪門』における五門禪・十五門禪について発表を行つた。<sup>(2)</sup>それは各禪門に関する講説を中心として、その後<sup>(3)</sup>に成立した『修習止観坐禪法要』（以下、『天台小止観』）所説の五門禪、及び晩年の『摩訶止観』所説の十門禪における記述との比較・対照を行うことによつて、その特徴を明らかにしようとして試みたものであつた。その結果として、各禪門に関する考察はある程度進展させることができたが、そうした中で、五門禪の第四である因縁門については科文上の比較・対照に留まるものであつたため、これに関する具体的な講説の対比を行うことが課題として残されていた。そこで、

本稿では前の研究を踏まえて、『次第禪門』所説の因縁門に関する具体的な記述を確認し、『天台小止観』『摩訶止観』における当該部分との比較・対照を行うことによつて、因縁門への考察をより深めることにしたい。

## 因縁門の講説について

『次第禪門』において因縁門に関する直接的な講説が行われるのは、内方便の第二である「驗善悪根性」中であり、そこでは(1)三世の十二因縁、(2)果報の十二因縁、(3)一念の十二因縁という三種が示されている。ただし、そこにおける講説では因縁門の発相に関する内容が示されるのみであり、修習方法等の詳細が明かされていない。<sup>(3)</sup>そのため、因縁門に関する記述は他の禪門に比べて少ないと言わざるを得ないが、しかしながら、悪の対治法を示す中に因縁門についての講説を見ることができるといえる。

そもそも、『次第禪門』における内方便の第二「驗善悪根性」

『釈禪波羅蜜次第法門』における因縁門について（大松）

には善と悪のそれぞれを験する段があり、その中で因縁門は五種ある内善のうちの第四として説かれている。そして、この五種の内善に対して示される悪法が五種の不善法であつて、これらの内善と不善法はそれぞれ対応関係にあると言え(4)る。つまり、内善の第四である因縁門と不善法の第四として示される愚痴の講説には関連があるのである。愚痴に関する説示としては、次の如く記されている。

四明治愚痴多病。如經中説。愚痴多者。教觀因縁。

（『大正蔵』四六卷、五〇三頁、上段）

すなわち、愚痴は因縁を觀することによって対治するものであると述べられている。したがって、ここでは悪法である愚痴を治するための方法が明かされており、これは要するに因縁觀を修する方法であるから、『次第禪門』における因縁門に関する講説は、前に述べた発相に関する部分とそれに対応する悪法である愚痴の対治法（＝因縁觀の修習方法）を示す箇所において行われていることがわかる。そのため、因縁門の考究にはこれらを併せて参照することが不可欠である。

また、愚痴に関する講説中には、対治法としての因縁門の修習方法を示す前段に、その発相についての記述も確認できる。これは直接的に因縁門を説く内容ではないが、既に述べたように、因縁門と愚痴は対応するものであるから、適宜、

この部分を参照することも必要である。

以下では、これらの『次第禪門』の講説を中心として、『天台小止觀』『摩訶止觀』との比較・対照を行うこととする。

### 『天台小止觀』所説の因縁門との関連

『天台小止觀』における因縁門は善根の発相を明かす中で説かれており、この点は『次第禪門』と同様である。ただし、講説自体は『次第禪門』におけるそれよりも更に簡略である。次の如くである。

四因縁觀善根發相。行者因修正觀故。若得欲界未到地。身心靜定。忽然覺悟心生。推尋三世。無明行等諸因縁中不見人我。即離斷常。破諸執見。得定安隱解慧開發。心生法喜不念世間之事。乃至五陰十二處十八界中。分別亦如是。是為因縁觀善根發相。

（『大正蔵』四六卷、四九六頁、下段）

この部分が『天台小止觀』における因縁門に関する講説の全てであり、『次第禪門』とは違って、これ以外の箇所において因縁門への言及が見られるということはない。こうした点は『天台小止觀』の性質上、当然のことであり、注意すべきはこれが『次第禪門』における因縁門と如何に関連するかという点である。

そこで、『次第禪門』における講説を確認すると、『天台小止觀』の所説と同様の記述が見られることがわかる。次に挙

げる通りである。

一明三世十二因縁善根発者。亦於欲界未到定心中。忽然覺悟心生。推尋三世。過去無明以來。不見我人無明等法。不断不常。能破六十二種諸邪見網。心得正定。安隱寂然。觀慧分明。通達無礙。身口清淨。正行成就。此是三世十二因縁觀慧善根発相。

〔大正蔵〕四六卷、四九五頁、下段

果報十二因縁者。觀現在歌羅邏時。名曰無明。乃至生老死等。現在即有五陰十二入十八界成就。皆從因縁生。此歌羅邏時。即有三事。一命二暖三識。故名無明。此既從縁而生。無有自性。

〔大正蔵〕四六卷、五〇三頁、中段

前者は三世の十二因縁、後者は果報の十二因縁に関する講説であり、『天台小止観』の記述と字句が一致する箇所も見られるなど、同様の内容が示されていることは明らかである。つまり、『天台小止観』所説の因縁門は、『次第禪門』における因縁門の第一である三世の十二因縁、及び第二である果報の十二因縁の講説を基にして示されていると言える。既に述べたように、『天台小止観』においてはこれ以外に因縁門に関する講説が見られないため、結局のところ、『次第禪門』の一部を抜粋・抄略して因縁門が説かれていることになる。

なお、『次第禪門』で示された一念の十二因縁が『天台小止観』において説かれていない理由については、本文中にそれが明記されていない。ただし、後述するように、一念の十二

〔釈禪波羅蜜次第法門〕における因縁門について（大松）

因縁は『摩訶止観』において観不思議境中に摂められるので、『天台小止観』においても善根の発相に関する講説の範疇にないと考えられた可能性はあろう。

### 『摩訶止観』所説の因縁門との関連

『摩訶止観』における因縁門は十境・十乘観法を明かす中、禪定境を説く段で示されている。ここから『次第禪門』所説の因縁門と関連のある記述を挙げると次の如くである。

名色由初託胎識。初託胎名歌羅邏。此時即具三事。一命二燼三識。……当知名色豈不由識。識由業行。過去持五戒善業。業使人中受名色。過去破五戒惡業。業使三塗受。故知識由於業。業即行也。行由無明痴愛。造作衆行使識流轉。從過去來今。從今愛取縁有。有能含果招未來生死。三世因縁空無有主。

〔大正蔵〕四六卷、一二五頁、下段

若三昧発時其心明淨。見歌羅邏五炮開張生処住処。亦見行業善惡所為好醜。亦見未來生死之事三世分明。是名不隱没相。

〔大正蔵〕四六卷、一二六頁、上段

これらはいずれも前に挙げた『次第禪門』における三世・果報それぞれの十二因縁に関する記述と軌を一にするものである。しかしながら、『次第禪門』と異なるのは、三世・果報それぞれの十二因縁が明確に区分されて説かれていない点である。そもそも『摩訶止観』は『次第禪門』ほど細かく科文

『釈禪波羅蜜次第法門』における因縁門について（大松）

を分けて禪觀に関する術語や概念の説明を行うことはなく、この部分もそれが顕著である。その一方で、『次第禪門』で示された個別の講説がそれぞれ関連付けられ、体系化されている点が『摩訶止觀』の特徴であると言える。要するに、『摩訶止觀』では三世・果報それぞれの十二因縁をより巨視的に捉え、両者の関係性を明らかにしつつ十二因縁による善根の発相を説くのである。

ところで、『次第禪門』において因縁門の第三として示された一念の十二因縁は、『摩訶止觀』では前の二種の十二因縁と異なる段において説かれている。次の通りである。

復次十二因縁十如十境。在異心中是生滅思議。在一念心中是不生不滅不可思議。華嚴云。十二因縁在一念心中。大集云。十二因縁一人一念悉皆具足。此猶存略。若一人一念悉皆具足十界十如十二因縁。乃可稱為摩訶衍不可思議十二因縁耳。

（『大正蔵』四六卷、一二七頁、上段）

これは、禪定境に対して十乘觀法の第一である觀不思議境を用いることを明かす段における記述である。前の二種の十二因縁が善根の発相に関する講説中で示される一方で、この一念の十二因縁のみは觀不思議境を明かす中で説かれており、さらに、これを「摩訶衍不可思議十二因縁」と称して、禪定境に対して用いる觀不思議境そのものであると述べている。したがって、一念の十二因縁は前の二種のそれとは明らか

かに差別化が図られているのである。この点が、前に述べた『天台小止觀』において一念の十二因縁が扱われない理由に通じると考える。

ただし、『次第禪門』における一念の十二因縁の講説では、これが前の二種の十二因縁と異なる特別なものとして扱われている様子はなく、次の通りに記されるのみである。

三明一念十二因縁善根発者。亦於欲界未到靜定心中。忽然自覺刹那之心。無人無我。性本無実。所以者何。一念起時。必藉因縁。言因縁者。即具十二因縁。縁無自性。一念豈有定実。若不得一念之実。即破世性邪執。心与正定相应。智慧開發猶如涌泉。身口清淨。離諸邪行。是為一念十二縁善根発相。

（『大正蔵』四六卷、四九五頁、下段—四九六頁、上段）

これを見るに、『大集経』に依って一念の十二因縁が明かされている点は『摩訶止觀』と同様であるが、これが特別な觀法であるとは全く述べられていない。当然ながら、前の二種の十二因縁と同じく、善根の発相に関する段において示され、それらと並べて説かれるのみである。したがって、『次第禪門』の段階では、一念の十二因縁のみを特別視するような記述は一切見られないのである。そのため、両書において一念の十二因縁の扱いが異なる点が特に注目される。

## 結論

本稿を要約すると次の通りである。

一、『次第禪門』における因縁門は、「験善悪根性」中の善根の発相を明かす段、及びそれに対応する不善法の第四である愚痴を明かす段において説かれている。

二、『天台小止観』における因縁門は、『次第禪門』所説の三世・果報それぞれの十二因縁の講説に基づくものであり、その内容を一部抜粋・抄略したものである。残る一念の十二因縁については、『天台小止観』中で言及されることがなく、その理由も明記されていない。ただし、後の『摩訶止観』における一念の十二因縁の扱いから推察すると、善根の発相を明かす中でこれを示すのは不適切であるとされた可能性は指摘できる。

三、『摩訶止観』における因縁門は、『次第禪門』所説の三世・果報それぞれの十二因縁を互いに関連付け、その体系化を図っている点特徴的である。また、一念の十二因縁のみは前の二種のそれとは差別化され、十乗観法の観不思議境中に撰められている点が注目される。

1 智顛の生涯における時代区分は、後掲①の二四―二七頁等を参照。

2 後掲②③を参照。

3 因縁門に関して『次第禪門』巻第三之上には「若欲具論十五門

『釈禪波羅蜜次第法門』における因縁門について（大松）

禪。事理広博。深遠之相。下第七大段明修証中。一一從始訖終。当少分分別」（『大正蔵』四六卷、四九六頁、中段）とあり、詳細は後に譲ることが述べられているが、当該部分は不説である。

4 後掲④を参照。

5 後掲①に「本書（『天台小止観』）は従来漠然と考えられていたような摩訶止観の要略でなく、次第禪門の前四巻の要用を抜抄したものであることは明了である」（括弧内筆者、二四八頁）とある。

〈参考文献（一次資料）〉

『次第禪門』（『大正蔵』四六卷、四七五頁、上段―五四八頁、下段）  
『天台小止観』（『大正蔵』四六卷、四六二頁、上段―四七五頁、上段）  
『摩訶止観』（『大正蔵』四六卷、一頁、上段―一四〇頁、下段）

〈参考文献（二次資料）〉

① 佐藤哲英『天台大師の研究』（百華苑、一九六一年三月）  
② 大松久規『釈禪波羅蜜次第法門』における五門禪について（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第一五号、二〇一四年七月、一八三―一八八頁）

③ 大松久規「智顛の禪観について——五門禪・十五門禪の変遷——」（『駒澤大学仏教学部論集』第四五号、二〇一四年一〇月、三三三―三四〇頁）

④ 大松久規『釈禪波羅蜜次第法門』「験善悪根性」について（『印度学仏教学研究』第六二巻第一号、二〇一三年二月、三九―四二頁）

〈キーワード〉 智顛、『次第禪門』、禪観、因縁門、験善悪根性

（駒澤大学禅研究所研修員・博士（仏教学））